新歓勉強会レジュメ

サリンジャーを読む―作家編―

2006.4.14　三浦晃

０．　導入

野崎孝は訳書『ナイン・ストーリーズ』の「あとがき」の中で、1949 年にサリンジャーが短編『小舟のほとりで』を「ハーパーズ・マガジン」に発表した際に、雑誌の編集者宛に送った手紙を引用している。

最初におことわりしておきますけれど、僕にもしも自分の雑誌というものがあるとしたら、執筆者の経歴などというものを乗せる欄は絶対に設けないだろうと思います。作者の出生地、子供の名前、仕事のスケジュール、アイルランド独立運動の際に兵器を密輸したかどで逮捕された年月日などというものを僕は格別知りたいとは思いません。そういうことを知らせてやる作者はまた、開襟シャツなんぞを着たところを写真に撮られたりして――顔はきまったように四分の三の角度から撮ったプロフィル、深刻な表情を湛えているといったあんばいです。そして細君はたいてい「すばらしい奴」か、さもなければ「立派な女性」ということになっています。[1]

この手紙が書かれた当時、サリンジャーはいくつかの雑誌に定期的に短篇を発表している新進作家の一人に過ぎなかった。つまりどう控えめに見ても、自分の作品を買ってくれた雑誌に対してこれほど強気の発言が出来る立場ではなかったはずだ。彼の、自分の作品の出版者に対するこうした態度は、その後の作家人生においても弱まるどころか一層厳しいものになっていく。何故、サリンジャーは経歴の公開に関してそれほどまでに神経質な態度を取るのだろうか。

J.D.サリンジャーが「現代の隠者」と呼ばれるほど(作家としてと言うより人間として)特異な存在として認識されている理由は二つあると筆者は考える。

① 自分の作品を発表する立場にある出版者を信用せず、作品の改変は勿論、後年に至っては序文・はしがきや作者の経歴・写真等の掲載すら認めず、過去の発表作の再録も許可しないという、極端に偏狭な態度を示している点。
② 作家本人もメディアへの露出を嫌い、インタビューの類もほとんど許可せず、田舎に移り住んで他人との接触を持ちたがらない点。

とは言え、J.D.サリンジャーはもはや「謎の作家」ではない。その経歴はかなり細かなところまで明らかになっているし、それらは(本人の妨害を受けつつも)公にされ、その気になれば誰でも、彼の実人物像を知ることが出来る。

---

[1] J.D.サリンジャー『ナイン・ストーリーズ』あとがき p295

にもかかわらず、サリンジャーが今なおメディアを避け、ニューハンプシャーの田舎に引き篭もっているのは一体何故なのか。何が彼をそこまで「人間嫌い」にさせ、徹底的なまでの隠遁生活を選ばせたのか。

本勉強会は、こうした疑問について考察する為、作家の人生を紐解き、人間としての J.D. サリンジャーを紹介することを目的としている。必然的に、サリンジャーの人物像を考えるに当たって重要と思われるいくつかの彼の著作についても触れる。

１．　少年期

１．１　出自

ジェローム・デヴィット・サリンジャーは 1919 年 1 月 1 日、ユダヤ人の父ソロモン(通称ソル)・サリンジャーとキリスト教徒の母マリー・ジリックの間に二番目の子供として生まれた。両親の結婚の際には宗教が問題になったようで、母親はいかにもカトリック風の「マリー」と言う名前を後に「ミリアム」に改名している。

ジェロームは幼少期から、両親ともにユダヤ人であると信じ込んでいたようで、自分が実際は「半ユダヤ人」である[2]ことを知らされてからは、出自に対する一種のコンプレックスを持っていたようだ。

サニー(ジェロームの幼少期の愛称)***のバルミツヴァー[3]が終わってすぐのことだった。両親は二人を前に、自分たちはほんとうのユダヤ人ではない、といいだした。二人の母ミリアムはほんとうはマリーという名で、ソルと結婚したからユダヤ人として「通って」きた、というのだ。***[4]

こういった事情から、両親は子供達が親の出自について質問することを極端に嫌っていたようだ。サリンジャー家では、「デーヴィット・カッパーフィールド式のくだんないこと」は口にしないのが常だった。

１．２　出身階層と作品のギャップ

サリンジャーの出身階層に関しては、注目すべき点がいくつかある。

前述のようにサリンジャーはユダヤの家系に生まれているが、他の多くのユダヤ系作家と違い、中心的な作品の世界はユダヤ系移民とその子孫の物語ではなく、都会的な WASP(特権的白人階級)[5]の世界だった。このように彼がその作品において自身のユダヤ性を脱し、アングロサクソン系の上位中流階級を描いたのは何故か。この問題を考察する際、彼の父親の遍歴が重要な意味を持ってくる。

彼の父親ソル・サリンジャーは、イリノイ州シカゴの中流階級の生まれだが、上昇志向の強

---

[2] ユダヤの家系では一般に母方が優越視されるため、母親がユダヤ人でない息子は厳密にはユダヤ人ではない。
[3] ユダヤ教における成人式。男子が 13 歳になった時に行う。
[4] マーガレット・A・サリンジャー『我が父サリンジャー』p31
[5] White Anglo-Saxon Protestant の略。原意は「白人アングロサクソン系プロテスタント」だが、現在では中流階級以上の白人を蔑称の意味合いを込めてこう呼ぶことが多い。

い人物だったらしい。ソルはシカゴに本社を置く輸入会社に勤務し、後にニューヨークに移ってニューヨーク支社長にまで昇格している。つまり経済的な面で、一代で成功を築いた人物であったと言える。

社会的地位に関するソルの上昇志向は、ニューヨークに移って以降のサリンジャー一家の転居歴から窺うことが出来る。

1919 年：ハーレム北部からモーニングサイド・ハイツへ転居。

1928 年：アッパーウェストサイド、W82 丁目へ転居。

1932 年：アッパーイーストサイド、パーク街 E91 丁目へ転居。

サリンジャー一家は転居を繰り返すごとに、平均所得の高い地域へと移動している。特に重要なのは 1932 年のパーク街への転居である。アッパーイーストサイドはアッパーウェストやその他の地区と違い、ある程度社会的地位のある人々が集まる住宅地である。中でもパーク街は 19 世紀末から現在まで続く、富裕層のための高級住宅地だ。

ポール・アレクサンダーはサリンジャーの伝記『サリンジャーを追いかけて』の中でソルのパーク街転居について以下のように述べている。

興味深いのは、その地区がユダヤ系の人々がほとんど住んでいないとされる地域だということだ。(中略)彼はいま、ニューヨークのほかの地区を通り過ぎて、ワスプと金を意味する地区、アッパー・イーストサイドのパーク街に住むことによって、まさにそのユダヤ性を放棄しているのだった。[6]

息子ジェロームが後年、都会的で洗練された WASP の世界を描くようになったのは、この父親の影響が大きかったと思われるが、この親子の関係は息子の幼少期から後々に至るまで、あまり友好的とは言い難いものだったようだ。

１．３　ヴァレー・フォージ陸軍幼年学校

ジェロームは 1932 年から 1937 年までの間、三つの学校に通っている。私立マクバーニー校[7]、ヴァレー・フォージ陸軍幼年学校、ニューヨーク大学の三つだが、このうち卒業証書を受け取ることが出来たのはヴァレー・フォージだけだった。彼は後年の数少ないインタビューの中でしばしば「15 歳の時から執筆活動を始めた」と語っているが、これはこのヴァレー・フォージ校に在籍していた時期に当たる。また、ヴァレー・フォージは代表作『ライ麦畑でつかまえて』の主人公ホールデン・コールフィールドが最後に退学処分を受けたペンシー校のモデルとも言われている。サリンジャーのヴァレー・フォージ在籍時代の友人リチャード・ゴンダーの証言を以下に引用する。

気にくわない奴がいると、彼はよく「ジョン、君はまったく王子様だね」と言うんだ。もちろん、これは「ジョン、おまえなんかくそったれだ」ってことだよ。(中略)ジェリー(ジェローム

---

[6] ポール・アレクサンダー『サリンジャーを追いかけて』p37

[7] マクバーニーは『ライ麦畑でつかまえて』の作中で、ペンシー校のフェンシングの試合相手として実名で登場する。

の愛称)*は英語の先生の自慢のタネだったけど、他の学科はギリギリ合格の線だった。*[8]

こうした少年期のサリンジャーの特徴は、そのままホールデン・コールフィールドに当てはまる部分も多い。『ライ麦畑でつかまえて』には以下のような記述が見られる。

僕は、床に座ったまま腕をのばして、軽くあいつの肩を叩きながら「おまえは王子様だよ、アクリー坊や」と言ってやった。「知ってるか、自分で？」[9]

つまりですね、英語は、まあ、ゼンゼン勉強しなくてもよかったわけです、ただ、ときどき作文を書くだけで。[10]

１．４　ヨーロッパ旅行・ウィーンでの経験

ヴァレー・フォージを卒業し、その後通ったニューヨーク大学を成績不良のため自主退学したサリンジャーは、1937 年にヨーロッパに渡り、数ヵ月後にニューヨークに戻ってきている。
このヨーロッパ旅行は父親の提案で、輸出入の仕事を覚えさせるためだったようだが、後にサリンジャーがヘミングウェイに書き送った手紙から、その意図は失敗に終わったことが窺える。ヘミングウェイへの手紙の中で、彼はその時の体験を以下のように記している。

とうとうむりやりビドゴシチに連れていかれ、2 ヶ月のあいだ豚を処分し、大男の食肉解体職の親方といっしょに雪の中を荷馬車で走った。[11]

このヨーロッパ旅行について言及したヘミングウェイへの手紙の中でもう一つ、注目に値する記述がある。それに関して、前出のポール・アレクサンダーは以下のように述べている。

友人たちとの会話や手紙、それに彼の書いた作品から推測すると、ウィーンでの滞在は彼にとって楽しいひとときだったらしい。そこで出会ったひとりの少女が彼の思い出に残っていた。後年ヘミングウェイへの手紙で語っているところによれば、思い出としていつも胸に抱いているのは、この少女とアイススケートに行ったある日の午後のことで、ひざまづいて少女にスケート靴をはかせてやった時の、ありふれた、それでいて胸にしみる姿が忘れられないという。(中略)彼の人生であきらかなのは、年を取るにつれて、もう初老という年代になっても、彼の理想的な愛情の対象が、いつもウィーンのこの少女とおなじ年ごろだということだ。いろんな意味で、この単純な事実はサリンジャーの人生と作品を決定づける特質の一つと言えるだろう。[12]

---

[8] ポール・アレクサンダー、前掲書 p46
[9] J.D.サリンジャー『ライ麦畑でつかまえて』p76
[10] 同上 p19
[11] ポール・アレクサンダー、前掲書 p48
[12] 同上 p49

２．　青年期

２．１　コロンビア大学、ホイット・バーネット

思慮深そうな黒い瞳の若者が創作の授業に出ていた。ノートもとらず、べつに身を入れて聞くふうでもなく窓の外を見ていた。学期が終わる 1 週間前かそこらというとき、彼はとつぜん生き返ったみたいに書きはじめた。あっというまにいくつかの作品が彼のタイプライターから生み出され、そのほとんどが出版された。その若者が J.D.サリンジャーだった。[13]

上の引用文はサリンジャーの作家人生において恩師とも言える人物であるホイット・バーネットが後年、1939 年当時のサリンジャーとの出会いを回想した一文である。

1939 年の春、サリンジャーは創作についての専門的な技術を学ぶため、コロンビア大学に設けられた短編小説の創作講座に登録し、そこで教鞭を取っていたバーネットに才能を見出されることになる。

ホイット・バーネットは当時、短編作家として、また自身が創刊した文芸誌「ストーリー」の編集者として活動しており、新進作家の育成に定評があった。「ストーリー」に処女短編が掲載された作家として、ノーマン・メイラー、ウィリアム・サローヤン、テネシー・ウィリアムズ、トルーマン・カポーティ、カーソン・マッカラーズ、ジョーゼフ・ヘラーなどが挙げられる。

1975 年、サリンジャーは「ホイット・バーネットに敬礼　1899-1972」と題する小文の中で以下のように述べている。

彼は大抵、遅れて教室に姿を現し、早い時間にそっといなくなった―私はよく思うのだが、どんなに優れた、誠実な短編小説講座の教師でも、人間としてバーネット氏がやった以上のことが出来るかどうか疑わしいところだ。彼の方法や動機について多少の意見がないわけではないが、ここで是非とも述べておくべきだと思うのは、彼が優れた短編小説に情熱を持っていたという点である。[14]

サリンジャーが提出した短編『若者たち』は 1940 年「ストーリー」誌に掲載の運びとなった。

２．２　ホールデン・コールフィールド創出

サリンジャーがプロ作家として活動を始めた当時の出版業界は、現在でいう「新人賞」のような公募システムがなく、作家が一流として認められるには、作品が発行部数の多い高級雑誌(スリック)に採用される他なかった。サリンジャーもその出版業界の通例に従って、雑誌に作品を送り続けた。当時の大衆小説市場を席巻していた雑誌として「コリヤーズ」、「エスクァイ

---

[13] 同上 p58

[14] [A SALUTE TO WHIT BURNETT 1899-1972] Web サイト「Dead Caulfields (http://www.geocities.com/deadcaulfields/index.html)」掲載、拙訳。

ア」、「サタデー・イヴニング・ポスト」などが挙げられるが、中でもサリンジャーは当初から「ニューヨーカー」にこだわっていたようだ。当時の高級雑誌の中でも、「ニューヨーカー」の原稿料はトップレベルであり、編集者は作家に思いやりと誠意を持って接することで知られていた。この雑誌には寄稿者紹介欄がなく、作品の改変はすべて作者の了解を得た上でなされていた。サリンジャーのこの「ニューヨーカー」へのこだわりは、後年、出版業界と彼の関係が悪化した後も続いている。

1941 年、22 歳という異例の若さで「ニューヨーカー」に初めて作品を採用された時、サリンジャーは作家としてやっていく自信をつけたに違いない。この時採用された作品が『マディソン街のはずれの小さな反抗』であるという事実も示唆的なものを感じる。何故ならこの作品はサリンジャーの後の代表作にして唯一の長編『ライ麦畑でつかまえて』の語り手と同名の少年、ホールデン・コールフィールドが事実上初めて登場する作品だからだ。

しかし、『マディソン街のはずれの小さな反抗』が実際に「ニューヨーカー」に掲載されたのは採用から 5 年を経た 1946 年のことだった。当初はすぐにでも掲載する意向だった「ニューヨーカー」の編集部が準備を進めているうちに、アメリカにとって、そしてサリンジャーにとっても後により大きな問題となる事件が起こる。

２．３　第二次世界大戦

サリンジャーの人生と作品を考える上で、二次大戦における戦争体験は無視できない。

彼は 1942 年に入隊後、二回の転属を経て、43 年末に諜報活動部隊へ配属されている。その後 1944 年初め、イギリスに派遣された第 4 歩兵師団司令部へ配属されるが、ここでの体験が彼のその後の戦争観及び作品に大きな影響を与えることになる。

彼は 44 年 6 月 6 日、ノルマンディ上陸作戦に参加、その後 11 ヶ月に渡ってヨーロッパで計 5 回の戦闘に参加している。その中には、二次大戦ヨーロッパ戦線において最悪の激戦の一つとも言われる「ヒュルトゲンの森の戦い」や「バルジの戦い」も含まれている。

また、ポール・アレクサンダーは「ヒュルトゲンの森の戦い」について、興味深い見解を述べている。

のちの軍事専門家によると、おそらくヒュルトゲンの森の戦いはそもそも戦うべきでなかった、という。(中略)この戦いが起こったのは軍の危険な方面への展開をとめられなかったためで、それはヨーロッパ北西部戦線の総指揮をとっていたアメリカの「オマー・ブラッドレー司令官以下幹部のとんでもない采配ミスが続いた」せいだ、とある学者は指摘する。(中略)さらに悪いことに、多くの兵士は、そして、とくに諜報部の情報を知りうる立場にあったものなら察していたように、おそらく彼(サリンジャー)***は、軍が兵隊に強いた戦い、とくに終戦まぢかの戦いには、戦う必要さえなかった戦いがあったことを知っていただろう。***[15]

サリンジャーが、自らが参加した激戦が実は不必要な戦闘であったことを知っていた、とするこの説は容易に信頼できるものではないが、仮にそうだったとすれば、この体験が彼の精神と戦争観にどれほどの影響を与えたかは想像がつく。

この説の妥当性はどうあれ、激戦の体験がサリンジャーを精神的に追い詰めたのは間違いな

---

[15] ポール・アレクサンダー　前掲書 p107

い。1945 年 5 月にドイツの降伏によってヨーロッパでの戦闘が終結した二ヶ月後、ニュルンベルクの陸軍病院に入院し、神経衰弱との診断を受けている。

２．４　戦争(軍隊)を主題にした作品について―戦闘体験前/後

サリンジャーは配属中も軍隊生活の合間を縫って相当数の作品を発表しているが、その中には戦争及び軍隊を扱ったものも多い。注目すべきなのは、激戦の体験前と体験後で作品における戦争や軍隊の描き方に顕著な変化が見られることだ。

戦争体験前

- ある歩兵に関する個人的なおぼえがき
- 大戦直前のウェストの細い女
- やさしい軍曹
- 最後の休暇の最後の日
- 週一回なら参らない

配属中の戦争を扱った作品のうち、「ヒュルトゲン」以前のものとしては上の作品が挙げられるが、これらの作品には戦争の悲惨さや取り返しのつかない残酷さよりも、軍隊に対するセンチメンタルとも言える思い入れや、一種の戦争プロパガンダ的な要素を感じるものが多い。『ある歩兵に関する個人的なおぼえがき』では、戦争で片腕を失くした息子の復讐に燃える父親が中心的人物として描かれている。また、『最後の休暇の最後の日』では、弟が(おそらく戦争で)行方不明になったという知らせを受けた若者が以下のように語る。

ああ、殺して殺して殺しまくりたい。じっとすわっちゃいられないくらいさ。変じゃないか。ぼくは臆病で評判なんだぜ。生まれてからこの方、殴り合いをするんだって厭ったんだ。(中略)ところが今じゃあ、奴らを撃ちまくってやりたいんだ。[16]

戦争体験後

- フランスのアメリカ兵
- マヨネーズぬきのサンドイッチ
- 他人行儀
- エズミに捧ぐ―愛と汚辱のうちに

45 年以降の彼の作品に描かれた戦争は、それまでとは一変している。『フランスのアメリカ兵』は、ヒュルトゲン、バルジの戦闘からわずか三ヶ月後の 1945 年 3 月に発表された作品である。物語の中心的人物はサリンジャーと同じくヨーロッパの戦争に参加したアメリカの少年兵で、戦闘で疲れきった彼は、死んだドイツ兵のたこつぼから遺留品を取り除いてそこで眠ろうとする。以前の作品にあったような戦争に対するロマンチックな描写は消え、死と隣り合わせの焦燥と絶望感が描かれている。また、『エズミに捧ぐ』では戦争によって神経衰弱に陥った

---

[16] 『最後の休暇の最後の日』渥美昭夫訳。因みにこの若者の名前はヴィンセント・コールフィールド、行方不明の弟とはホールデン・コールフィールドのことである。

青年兵の悲惨な精神状態が淡々とした筆致で描かれている。

２．５　ヘミングウェイ

1944 年当時、アーネスト・ヘミングウェイは従軍記者としてパリのリッツ・ホテルに滞在していた。その時、新進作家だったサリンジャーがヘミングウェイに面会を求めたのが交流の始まりと言われている。

彼らの関係は奇妙なものだったと言える。ある時ヘミングウェイは、サリンジャーと拳銃の性能をめぐって議論になり、「たまたま近くにいた鶏をねらって、その頭を吹き飛ばしてみせた[17]」という。それが原因となったか否かは不明だが、確かに以後サリンジャーは折に触れてヘミングウェイを攻撃している。『ライ麦畑でつかまえて』にはヘミングウェイの代表作の一つ『武器よさらば』に関して以下のような記述がある。

ヘンリー中尉っていう男が出てきて、これがいい奴だとかなんとかいうことになってんだな。しかし、どうしてD･B[18]は、軍隊とか戦争とかいうものをあれほどきらっていながら、あんなインチキな本が好きなれるんだろう。[19]

他にもいくつかの記録から、彼らの関係は緊張したものであったと推測されるが、にもかかわらずヘミングウェイが自殺する 1961 年まで、二人は文通を続けている。[20]

２．６　シーモア・グラース創出

1948 年初めに「ニューヨーカー」に掲載された『バナナフィッシュにうってつけの日』は、サリンジャーの文壇での地位を考える上でも重要な作品である。この作品を発表した際、サリンジャーは「ニューヨーカー」と「第一拒否権」という契約を結んだ。これは、サリンジャーは以後全ての新作をまず初めに「ニューヨーカー」に送り、却下された後でなければ他の雑誌に発表できず、代償として多額の拘束金とそれまでより多くの原稿料が支払われるというものだった。この「ニューヨーカー」の決定を見ても、この作品がサリンジャーに対する出版界の評価を押し上げたことは間違いない。

また、この作品はその後サリンジャーが力を注ぐようになる「グラース家サーガ」の最初の作品であり、グラース家の「中心的人物」シーモア・グラースが初めて登場する作品でもあるという点で注目に値する。

３．　作家としての成功～隠遁生活

３．１　編集者との確執

サリンジャーと編集者の関係は、処女作『若者たち』を発表した時点では良好なものだった。

---

[17] ウォーレン・フレンチ『サリンジャー研究』p15
[18] ホールデンの兄。作中ではフルネームは明かされない。
[19] J.D.サリンジャー『ライ麦畑でつかまえて』p218
[20] これらの手紙の一部はプリンストン大学等に保存されているが、大半は発見されていない。

『若者たち』掲載から半年後、サリンジャーはホイット・バーネットに友好的な手紙を送っているが、その文面には後年の彼に見られるような編集者との緊張した関係は感じられない。

始まりは 1944 年、サリンジャーがヨーロッパ戦線に送られる直前にあったようだ。この時期、高級雑誌「サタデー・イヴニング・ポスト」がサリンジャーの作品を作者の了解を取らずに、タイトルを変更して掲載した。[21]

しかし、冒頭に挙げたようなサリンジャーと編集者の間の確執を考える上で、最も決定的と言える事件はホイット・バーネットとの決別であろう。1946 年、バーネットとサリンジャーはかねてより話し合っていた初の短編集『若者たち』の出版について、年中に出版するということで合意に達した。しかし、その計画は直前で御破算になってしまった。ストーリー社と提携して出版するはずだったリッピンコット社が共同出版に応じなかった為で、後にバーネットはこの時のことを以下のように述べている。

我々がもちこむ本の企画については、すべてリッピンコット社が最終的な拒否権を持っていた。(中略)それで本がだめと言われれば、我々としてはその最終決定をのむしかなかった[22]

これ以後、サリンジャーは「ストーリー」誌に一編も作品を発表していない。また、当時ほとんどの大衆雑誌が設けていた寄稿者紹介欄に対する否定的な態度も、この頃から始まったと思われる。47 年、雑誌「マドモアゼル」に『大戦直前のウェストの細い女』が掲載された時、この雑誌の寄稿者紹介欄には「J.D.サリンジャーは寄稿者紹介欄を信用していない[23]」とある。

また、48 年には雑誌「コスモポリタン」の編集部がサリンジャーの許可なしにタイトルを変更した作品[24]を掲載した。更に 49 年には冒頭に紹介した『小舟のほとりで』の件で「ハーパーズ」とも諍いがあった。

この数年間で、サリンジャーの出版界に対する考え方は急激に悪い方向へと変化したものと思われる。以後、彼は「ニューヨーカー」にますますこだわるようになり、「ニューヨーカー」以外には作品を発表していない。

３．２　『ライ麦畑でつかまえて』

一般的に、『ライ麦畑でつかまえて』は 10 年の歳月を費やして練られた作品であると言われるが、それは主人公ホールデン・コールフィールドの創出が 1941 年執筆の『マディソン街のはずれの小さな反抗』まで遡るところに由来するものであろう。

ホールデン・コールフィールドが登場する短篇はそれまでにもいくつか発表されており、明らかに『ライ麦畑でつかまえて』の原型になったと思われる作品もある。『マディソン街』もその一つで、ホールデンが女友達とデート中に唐突に駆け落ち話を持ち掛け、断られた後、クリスマスツリーの飾り付けについて深夜に彼女に電話するシーンが描かれるが、これは『ライ麦畑』の 17 章と 20 章の原型であると思われる。また、1945 年発表の『気ちがいのぼく』には、ホールデンが自分を退学にした先生に会いに行き、その後自宅の妹に会うシーンがあるが、これらは『ライ麦畑』では 2 章と 21 章の中心的挿話となっている。

---

[21] 『やさしい軍曹』、本来のタイトルは『兵隊の死』。
[22] ポール・アレクサンダー　前掲書 p123
[23] 同上　p125
[24] 『ブルー・メロディー』。本来のタイトルは『ガリガリいうレコードの針』。

1951 年 7 月、サリンジャー唯一の長編小説『ライ麦畑でつかまえて』がリトル・ブラウン社から出版される。この作品は J.D.サリンジャーの名を一躍世界的に有名にしたという点でも重要だが、この名声は作者の予期しないもの、もしくは少なくとも望んではいないものだったようだ。サリンジャーは発行前にゲラ刷りを読んだ記者達の書評を自分に転送させず、事前の宣伝活動もほとんど行っていない。また、作品が出版されると、本の表紙カバーから自分の顔写真を外させ、ファンレターを避けるためイギリスへ旅行している。この小説の成功と反響に対して、彼は当時、友人に以下のように語っている。

そろそろ『ライ麦畑でつかまえて』の熱がさめる頃だと思うと、全くほっとするよ。少しは楽しいと思わないでもなかったけど、あれは一種の熱病で、作家としても、個人としても、消耗だと思うことが多かったね[25]

1953 年の初め、サリンジャーはニューヨークを離れ、ニューハンプシャー州コーニッシュに土地を購入して転居しているが、この転居も時期的に見て『ライ麦畑でつかまえて』で得た(本人にとっては望ましくない)名声を避ける目的が大きかったのではないかと思われる。

３．３　東洋思想

サリンジャーの、主に後期の作品には、仏教、ヒンズー教等の東洋思想の影響が見られるものが少なからずある。彼の唯一の短篇集『ナイン・ストーリーズ』の冒頭には「隻手の音声[26]」と呼ばれる禅の公案が掲げられているし、収録作『テディ』にはヴェーダンタ哲学、及び輪廻説について、また、1957 年発表の『ゾーイー』には禅や大乗仏教に関する言及が見られる。

サリンジャー本人が東洋の思想に親しむようになったのは 1946 年、戦争から帰還して間もなくのことであり、その後、彼は生涯を通じてヴェーダンタを始めとする東洋思想に深く傾倒するようになったと思われる。彼のヴェーダンタ哲学に対する理解がどの程度のものかは定かではないが、『ライ麦畑でつかまえて』の出版とほぼ同じ時期に、サリンジャーは東洋の思想をますます深く追求するようになったと思われる。

また、サリンジャーはこの頃から唯物主義的価値観に反対する考えを持っていたらしく、作家リーラ・ハドリーは当時のサリンジャーについて以下のように語っている。

あるとき、わたしが画家のクラナハの絵が欲しいって言ったら、「その絵を買う必要はない。自分の頭のなかで所有することができるから」と言うの。1950 年代にしては考え方が進んでいたわ。(中略)つまり、物への執着が欲望を生み、欲望が苦しみを生む、となれば苦しみから逃れるためには…となるわけね。[27]

サリンジャーの東洋思想への傾倒は実践的なもので、思想面だけにとどまらず、瞑想や特殊な食餌療法も含んでいたようだ。

---

[25] ウォーレン・フレンチ　前掲書 p19
[26] 「両手の鳴る音は知る。片手の鳴る音はいかに？」
[27] ポール・アレクサンダー　前掲書 p172

３．４　隠遁生活、その後

1953 年にコーニッシュに土地を購入した時点では、サリンジャーの私生活はそれほど閉ざされたものではなかった。彼は特に、地元の高校生達と親しく交流していた。サリンジャーは転居後数週間で 10 代の若者たちと打ち解け、頻繁に自宅に招き、即席パーティーを開いてもてなしていたという。当時ウィンザー・ハイスクールの生徒だったシャーリー・ブラニーはその年の秋にインタビューに成功しているが、サリンジャーについて後に以下のように回想している。

彼はいわば我々の仲間の一人だった。(中略)彼はだれとだれが恋人同士かということもちゃんと心得ていた。(中略)彼は我々が頼めばどんなレコードでも自分のハイファイで聞かせてくれた。我々が帰ろうとすると、きまって彼はもう一曲かけようというのである。彼は我々が周囲にいるのを喜んでいるように見えた。[28]

しかし、ブラニーの記事が地元紙にスクープとして掲載されると、彼の態度は変わったようだ。インタビューの掲載後、彼はウィンザーの若者たちと交流を断ち、間もなく自分の所有地に高いフェンスをめぐらせた。

その後、彼はほとんど完全に「隠者」と言ってよい生活を営むようになった。

このシャーリー・ブラニーの記事を含めて、正式な合意の下で行われたサリンジャーのインタビューは数えるほどしかない。数十年に渡って、ほとんどの申し入れが本人に断られているためだ。そのため、成功したインタビューは(大した内容のものでなくても)それだけでニュースとして取り沙汰されるようになった。53 年以降、J.D.サリンジャーは数篇の作品しか発表しておらず、65 年に“最新作”『ハプワース 16，1924』を発表して以来完全に沈黙しているにもかかわらず、「有名になりたがらないことで有名になった」作家とも言える。

４．　おわりに

本勉強会では作品の解釈、作家論にはあえてこだわらず、青年期を中心に「人間」サリンジャーの人生を辿ることに焦点を置いてみた。確かに後年、隠遁生活を送るようになってからの彼の私生活には(これほどの有名人にもかかわらず)不明な点が多いことは認めざるを得ない。

しかし、一つだけ言えるとすれば、彼は自分の作品、作家としての自らの生き方にこれ以上ない程に誠実な姿勢で臨んだということである。

この勉強会が、参加者各位の「J.D.サリンジャー」への理解を深める為の一助となれば、筆者にとってこれ以上の喜びはない。

【参考文献】

『サリンジャーを追いかけて』ポール・アレクサンダー著　田中啓史訳　DHC 出版
『サリンジャーをつかまえて』イアン・ハミルトン著　海保眞夫訳　文芸春秋
『サリンジャー研究』ウォーレン・フレンチ著　田中啓史訳　荒地出版社
『我が父サリンジャー』マーガレット・A・サリンジャー著　亀井よし子訳　新潮社

---

[28] イアン・ハミルトン『サリンジャーをつかまえて』p222

『サリンジャーの世界』渥美昭夫/井上謙治編　荒地出版社
『イエローページ　サリンジャー』田中啓史編著　荒地出版社
『ライ麦畑でつかまえて』J.D.サリンジャー著　野崎孝訳　白水Ｕブックス
『ナイン・ストーリーズ』J.D.サリンジャー著　野崎孝訳　新潮文庫
『サリンジャー選集』②、③、別巻Ⅰ　刈田元司/渥美昭夫訳・編　荒地出版社